

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24年 4月 18日現在

機関番号：14101

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22820032

研究課題名（和文）年表編纂を中心とした滑稽本の基礎的研究

研究課題名（英文）The basically research for Kokkeibon and creating of the Kokkeibon Chronology.

研究代表者

吉丸 雄哉（YOSHIMARU KATSUYA）

三重大学・人文学部・准教授

研究者番号：10581514

研究成果の概要（和文）：滑稽本研究のための基礎的な資料となる滑稽本の年表をおおよそ完成させた。年表は「滑稽本出版年表（未定稿）」（享和二年から明治二十三年まで、約三百六十点）と「滑稽本写本年表（未定稿）」（約三十点）の二部構成である。年表は『日本古典籍総合データベース』のデータを基本とし、諸本を実見し、影印とマイクロフィルムを併用して完成させた。

研究成果の概要（英文）：I have largely completed the chronology of kokkeibon (early modern Japanese comic novels) to provide a basis for kokkeibon research. It consists of two parts: “Kokkeibon Publishing Chronology (unfinished)” (Kyowa 2 to Meiji 23, approx. 360 works), and “Kokkeibon Manuscript Chronology (unfinished)” (approx. 30 works). When creating the chronology, I have examined originals as well as photocopied or microfilmed records, based upon the data in “Union Catalogue of Early Japanese Books”.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	1,060,000	318,000	1,378,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,260,000	678,000	2,938,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：日本古典文学、近世文学、戯作、滑稽本、年表

## 1. 研究開始当初の背景

日本近世文学の研究のなかで、滑稽本の研究はとくに遅れていた。同じ戯作でも洒落本と人情本は研究が進んでいる。これは看過できない状況であり、洒落本と人情本と関係の深い滑稽本の研究が進まないかぎり、洒落本と人情本の研究の今後の発展も見込めない状態にあった。滑稽本に関しては、基本的な年表と書誌の確立もしておらず、基礎的な研究から再構築が必要であった。

## 2. 研究の目的

享和二年から明治中期までの滑稽本の書誌の収集と年表作成である。この分野に関して、精度の高い書誌を収集し、正確な年表を作成することを志した。

## 3. 研究の方法

『国書総目録』を発展させた国文学研究資料館『日本古典籍総合データベース』のデー

タをもとに、諸本を見て、その内容を補訂した。国立国会図書館・名古屋市蓬左文庫・東京大学総合図書館をはじめとする所蔵機関におもむいたほか、マイクロフィルムを使って、その内容を確認した。

#### 4. 研究成果

出版史の全体像が把握されていなかった滑稽本について、後述の(1)の成果である年表を作成したことによって、容易に一覧できるようになったことは大きな成果である。

今後、本年表は、滑稽本の研究のための基礎資料として広く利用されると思われる。また類縁性のある洒落本・人情本の研究にも活用されるであろう。

年表の作成時に(2)から(10)までの知見をあらたに得た。学会発表を行ったほか、雑誌論文や『式亭三馬とその周辺』や『鳥獣虫魚の文学史』に論考として収録してある。

(1)本研究の第一の目的である滑稽本の出版年表と未刊滑稽本の写本年表の作成を達成した。滑稽本の定義はさまざまだが、本年表では、『日本古典籍総合目録データベース』が「滑稽本」として分類しているもののうち、狭義の滑稽本とされるもの、すなわち、『道中膝栗毛』初編(享和二年刊)以降、滑稽を主題とする中本型の作品群を取り扱った。

項目は「書名」「書名読み」「巻・冊」「著・编者」「著・编者読み」「画工」「序跋」「刊年」「出版元」「主な所蔵元」「資料館保有主なマイクロ」「影印・翻刻」「注」「参照」からなる。

滑稽本の終焉が明確でないため、年表の下限はとくに定めず明治期の作品も年表に含めている。年表は、原本あるいはマイクロフィルムや影印を見ることで書誌を作成した。諸本ある場合、善本と推定される本から書誌を採った。基本的に出版・成立の年代順に並べてあるが、同じシリーズの作品は続けて登録した。書名は『日本古典籍総合目録データベース』をもとにしているが、原本の表記から一部修正したものもある。名跡が引き継がれた作者でも生没年により、特定が簡単にできる場合は、とくに何代目か注記していない。版元情報は地域ごとにまとめて、最後に地域記してある。版元情報は、「参照」項目の資料から採っているが、それとは違う場合は括弧で情報元を記している。

両年表は吉丸雄哉のホームページ <http://www.cc.mie-u.ac.jp/~yoshimaru/> でエクセルファイル”滑稽本出版年表稿”として公開しており、今後さらなる調査がすすみしだい随時更新を予定している。

(2)研究期間のうち、三馬の滑稽本を中心とする著述のうち、浮世草子との関連性が高

いものを選んで、比較を行った。三馬は八文字屋本をとくに利用したが、三馬の時代には、八文字屋本はブランドとしての力を失っており、懐古趣味として、かろうじて受け入れられるていどであったことがわかった。八文字屋本に関しては、気質物が利用されるのが主だが、文章が簡略化され、また気質よりも、当世風俗の描写に力を入れて、改変がなされた。八文字屋本の時代物は、合巻にほとんどそのままの形で利用されている。以上の知見は『式亭三馬とその周辺』二章三節「三馬と浮世草子」でその詳細を記している。

(3)十返舎一九など、三馬以外の、江戸後期の戯作者の洒落本・滑稽本と浮世草子との比較も行った。洒落本・滑稽本と浮世草子と分野は違うが、ともに芝居を扱った作品同士の類縁関係を調べた。具体的には、一九『満作豆』『田舎芝居』など江戸戯作と『野傾旅葛籠』『寛濶役者片気』『役者色仕組』など浮世草子で芝居にまつわる内容をもつ作品を比較した。『満作豆』のように、『野傾旅葛籠』の一部を改編するだけで、ほぼそのまま詞章を流用した作品もあれば、『野傾旅葛籠』と『田舎芝居』のように影響関係の明確でないものもある。だが、直接の影響関係は明確でないものの、ジャンルをこえた類縁性が見られ、両者の近似性が確認できた。このように芝居物の洒落本・滑稽本と浮世草子との関係に興味深い知見を得た。これに関する詳細は、『式亭三馬とその周辺』二章一節「芝居物の滑稽本と浮世草子」に論考としてまとめてある。

(4)式亭三馬の代表作である滑稽本『浮世風呂』に関して、あらたな知見を得た。近世小説において、教訓を笑いで包んで庶民教化に用いるのは、珍しいことではない。『浮世風呂』『浮世床』をはじめ、式亭三馬の滑稽本もおしなべて、教訓の要素を含む。しかし、女風呂を舞台とした『浮世風呂』二編三編は、「熟(つら／＼)監(かんがみ)るに、銭湯ほど捷徑(ちかみち)の教諭(をしへ)なるはなし」から始まる『浮世風呂』前編と比べても、全体の構成に教訓が強く関与しているといえる。三馬滑稽本のほとんどが話題のひとつとして、教訓のある会話を描くのに対し、『浮世風呂』二編三編は教訓を主題として全体を構成する。女性を上品と下品の二つの階層にわけて、言葉遣いや外見を活写してその特性を露わにしている。お稽古事や寺子屋での勉強をしっかりとすることで、よい奉公ができ、よい奉公からさらに教養を得ることで、よい結婚ができるといった、階層間の移動が努力により可能であることを教諭するのが目的といえる。登場人物の発話のなかに『女今川』『女大学』といった女訓書に書かれているよ

うな教戒の要素が含まれるが、より世間的な知恵を加えて、単に女訓書を読むのに比べて、かなり受け入れやすくしたのが特徴である。このように三馬が『浮世風呂』二編三編の中心に教訓を据えたのは、婦女子が読むものは、教訓的でなければならないと三馬が考えていたためであろう。浮世草子の気質物の教訓性に三馬は着目して『世間娘気質』を合巻に流用しているが、それは同様の姿勢に基づくといえる。

以上の内容は、2010年度に近世文学会島根大会で学会発表したのち、『式亭三馬とその周辺』二章四節「『浮世風呂』女風呂編における教訓」としてその詳細を記した。

(5) 研究代表者である吉丸は、「式亭三馬作『田舎芝居忠臣蔵』について一、『田舎芝居』の系譜一」（『文学・語学』、全国大学国語国文学会、第174号、平成14年9月）という論文を過去に記した。いわゆる「田舎芝居物の滑稽本」の系譜を明らかにした論文である。本研究期間のうち、年表作成であらたに知った作品を系統樹図に加え、内容の増補を行った。『式亭三馬とその周辺』一章一節「三馬作『田舎芝居忠臣蔵』について」がそれにあたる。

(6) 研究代表者である吉丸は、「素人狂言物の滑稽本」というテーマで以前論文を発表している（『国語と国文学』（東京大学国語国文学会）第83巻1号、平成18年5月）。本研究期間に、その内容を増補して、『式亭三馬とその周辺』一章二節「素人狂言物の滑稽本」を記した。素人狂言物の滑稽本の系譜を調べた内容だが、以前の論文に比べて、年表作成時にあらたに知り得た作品を増やしている。

(7) 研究期間のうち、「素人狂言物の滑稽本」というテーマを発展させて、落語芝居咄に芝居物の滑稽本が与えた影響を調べた。とくに落語「蛙茶番」を例に取り、その成り立ちと咄の内容の変化を確認した「蛙茶番」は、前半の役揉めの趣向を素人狂言物の滑稽本から得、後半のふんどの趣向を咄本から得たと思われる。「蛙茶番」はその名の通り、茶番に関する部分が咄に含まれていたが、素人芝居や茶番が行われなくなるにつれて、その部分が省かれ、また芝居がかりのせりふを、時には音曲入りで、聴かせるよう変化したという知見を得た。『式亭三馬とその周辺』一章三節「滑稽本・咄本と落語芝居咄」として、その詳細を記した。

(8) 研究期間に刊行した『式亭三馬とその周辺』四章二節「三馬の狂文」は、三馬の狂文を報条文・賛・序の三つに分け、狂文の表

現手法と俗語の使用方法の型をあきらかにした内容である。

狂文は興味のある文章を書くという点で、戯作と分離されるものではない。狂文の表現手法が、戯作の風景描写に活用されることもある。戯作の顔でありながら、独立して鑑賞できる序の形の狂文は、戯作の縮小版といえる。狂文とそれに附された狂歌の関係をみれば、狂歌は狂文を、より小さくしたものだといえる。よって、戯作の縮小版として、狂歌と狂文があったといえる。

以上が論考の趣旨であるが、このうち滑稽本の序文を参照するのに、本研究が大いに役に立った。なお、平成24年6月に三重大学日本語学文学大会で行った学会発表「式亭三馬の狂文」は、それに基づく内容である。

(9) ある本の巻末広告に、同年に刊行されたと記されるが実際には刊行されていない作品、あるいは、近刊が予告されるものの、ついに刊行が確認されていない作品が存在する。このような作品の広告を未刊作品の広告と定義し、式亭三馬における未刊作品の広告を考察した。結果として、戯作研究のなかで軽視されてきた近刊予告の考察が作家研究に有用であることを示した。

滑稽本の刊記と広告を調査を行い、研究結果は、吉丸雄哉「式亭三馬の未刊作品の広告」（『三重大学日本語学文学』22号、平成23・6）として雑誌に発表した。

(10) 本研究期間のうち、虫を役者に見立てた、役者評判記のパロディ本である滑稽本『五百崎虫の評判』に関する論考を残した。『五百崎虫の評判』は、五代目市川團十郎だった市川白猿が作成した位付目録をもとに、烏亭焉馬と三升連の仲間が評判を増補して作成したものである。役者評判記のパロディは伝統のあるもので、虫を題材としたものにも『評判千種声』という先蹤作がある。それに比べて『五百崎虫の評判』は本格的である。役者評判記に倣って設けた「開口」は、普通の人間が狐のふりをしてまわりを騙す内容であり、落語「紋三郎稻荷」につながる狐詐欺群の先蹤作となっている。江戸時代は身近な虫に関心があった時代であり、本草学が盛んだった時代である。『五百崎虫の評判』は位付の虫の表記と選択が、草稿から定稿にいたる際に、『和漢三才図会』に準拠に変更されている。その他、引用の漢籍もすべて『和漢三才図会』の孫引きと考えられる。『和漢三才図会』に日本の古典の知識を加え、虫に関する豊かな学識にもとづきながら、それぞれの虫の特徴を述べる成功している。位付は、役者評判記に基づいた評価と分類がなされる。個々の虫をそれぞれ草花に見立てているが、これも役者評判記にもとづく趣向である。

『評判千種声』に比べて、内容も充実しており、また位付も方針に従ったもので、すぐれた戯作といえる。

滑稽本『五百崎虫の評判』に関する論考は、『鳥獣虫魚の文学史 虫の巻』（三弥井書店、平成 24・1）に「五百崎虫の評判」として収めてある。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①吉丸雄哉、式亭三馬の未刊作品の広告、三重大学日本語学文学、査読なし、22 号 2011、29-41。

〔学会発表〕（計 3 件）

①吉丸雄哉、近世小説にみる江戸のコミュニティ、三重大学東アジア懇話会、2012.3.3。

②吉丸雄哉、式亭三馬の狂文、三重大学日本語学文学大会、2011.6.25。

③吉丸雄哉、『浮世風呂』における教訓、日本近世文学会、2010.11.20。

〔図書〕（計 2 件）

①吉丸雄哉、他、三弥井書店、鳥獣虫魚の文学史虫の巻、2012、336-354。

②吉丸雄哉、新典社、式亭三馬とその周辺、2011、284。

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.cc.mie-u.ac.jp/~yoshimaru/>

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

吉丸 雄哉 (YOSHIMARU KATSUYA)

三重大学・人文学部・准教授

研究者番号：10581514